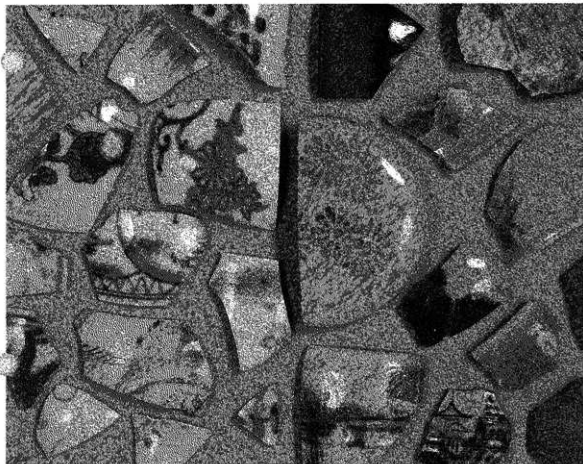


豎三蔵通遺跡

— 第12次調査の概要 —



1993

名古屋市教育委員会



例 言

1. 本書は、名古屋市中区栄一丁目23番に所在する竪三藏通遺跡の第12次発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、名古屋市教育委員会が受託し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員松村冬樹、服部哲也、水野裕之が担当した。
3. 発掘調査は、約420m²を対象に、平成4年4月21日から同年6月10日まで行った。
4. 発掘調査の実施にあたっては、名古屋市消防局総務部総務課、市建築局営繕課、市教育委員会文化課の協力を得た。
5. 発掘調査補助員として小西恒典が現場および、整理作業に参加した。
6. 調査の記録、出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
7. 本書は、調査担当者の協力を得て水野が作成した。

目 次

1. 位置と環境	1～3
2. 調査の概要	3～6
3. 遺構と遺物	7～29
(1)古墳時代以前	
(2)古墳時代	
(3)古代・中世	
(4)近世	
4. まとめ	31～32

1. 位置と環境



図1 遺跡位置図(5万分の1)

当遺跡は、現在、名古屋市都心の南西部に位置している。遺跡の東側は、国道19号線をはさんで、美術館、科学館のある白川公園である。ここは、白川公園遺跡として、縄文時代晩期、弥生時代後期の土器片や近世の墓地などが検出されている。また、南側の若宮大

竪三蔵通遺跡は、名古屋城から南へ連なる更新世層の台地上に位置する。この台地は、熱田層と呼ばれる粘土、シルト、砂などから成る水成堆積物である。陸地化(数万年前か)して以来、当遺跡からナイフ形石器が検出されているように、旧石器時代や縄文時代の遺物も出土しているが、これらは、谷地形の斜面に堆積した時期の複合する包含層から検出されている。台地上で検出された遺構は、現在のところ古墳時代以降から近世城下町期のものであり、弥生時代以前の遺跡の形成については、充分解明されていない。

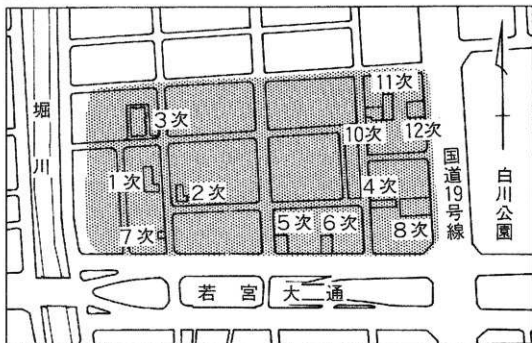


図2 遺跡推定範囲と調査区位置図

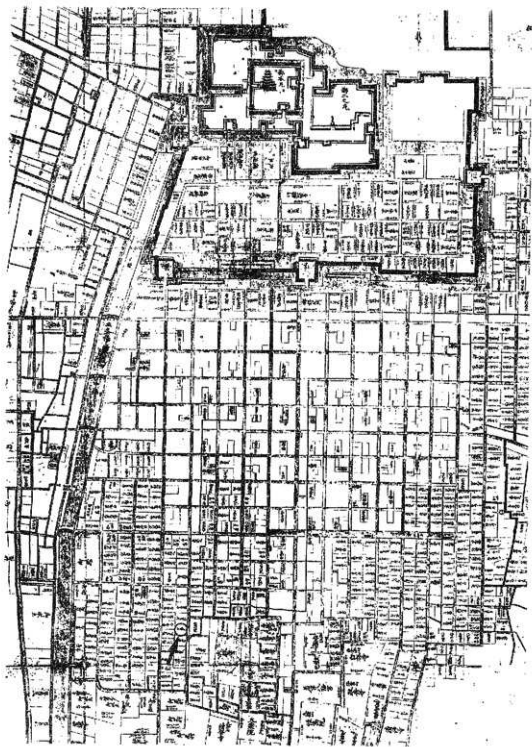


図3 尾府名古屋図〔宝永6年(1709)写〕部分(矢印・丸印は調査地付近)

通の地下では、近世以降の紫川護岸の石垣が検出されたほか、基盤層（熱田層）上の堆積層からは、縄文時代各期の遺物が混在して発見された。また、その上部には、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器も多く検出されている。この地点は、旧紫川遺跡と呼んでいる。

これらの遺跡は、近世においては、下級武家屋敷地、南寺町、都市河川という性格の異なる遺構の内容が明らかであるが、原始、古代においては、平出地や谷地形を含むものの一連の環境を考えたうえで、3遺跡の構造を評価しなければならない。特に、旧石器時代、縄文時代各期の資料は、当地域では貴重である。

2. 調査の概要

調査区域は、市消防局中消防署の改築予定地内にあたり、昨年度調査した11次調査区の40m程東側に位置する。面積は、約420m²である。調査は、平成4年4月21日から表土除去を行い、6月10日の埋め戻しまでの期間行われた。

表土は、調査直前まで建っていた消防署の建物基礎部分と合わせて除去したが、調査区南端部分を除いて、地表下約1.2mの基盤層面までは、近代以降の瓦礫を含む層が現在までの盛土層となっていた。基盤層は、灰色の砂層が検出されたが、これは、この上部にあったとみられる熱田層の黄橙色を呈するシルト層が消失している状態であった。11次調査地点では、標高約7.5mで黄橙色の熱田層上面

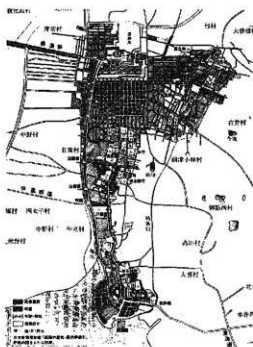


図4 名古屋城下町と遺跡位置（黒丸印）



写真1 調査前の状況



写真2 調査風景

が検出されたが、今回の調査区西端の一部にも黄橙色部分があり、標高は、約6.5mである。この付近の地形が南東に下がるという昨年度までの調査成果と同様の方向に傾斜していた。今回の調査区域では、熱田層の上部が、おそらく近代以降に整地され、消失したものと思われる。明治以降に埋設された土管が、東側に下がりながら連続している状態（おそらく、東側の紫川に接続していると思われる）は、基盤層上面の本来に近い傾斜を示しているものと思われる。（図8参照）。

遺構検出面の大部分は、砂質の基盤層であった。遺構の埋土は、砂質の灰褐色土が多く、比較的均質であった。検出された遺構は、周辺の砂層が埋土よりやわらかく、乾燥しやすい状態であった。遺構の形状が崩れやすいため、調査区の遺構平面図等の作成は、空中写真測量によらず、完掘後は、早めに平板測量によって測図していった。

検出された遺構は、径2 m程の不整形円形や、長方形を早する形の土坑がほとんどであり、溝状を呈するものもあった。柱穴などのピットは、ほとんど検出されなかったが、これは基盤の熱田層上部までが消失しているためかと思われる。調査区の南側は、灰褐色土の広がった部分があり、近世陶磁器などを包含していた。この部分は、土坑の集中する部分であったが、検出時は、平面プランを検出するのが難しく、包含層として扱った。

なお、10～12次調査地点の場所は、中消防署総合庁舎などの新築工事がはじまっている。



写真3 調査風景

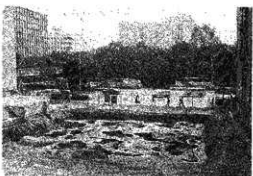


写真4 完掘状況

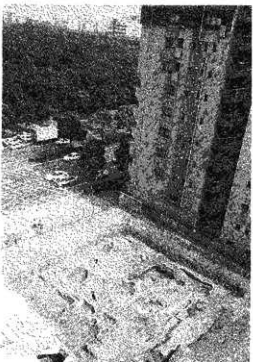


写真5 完掘状況

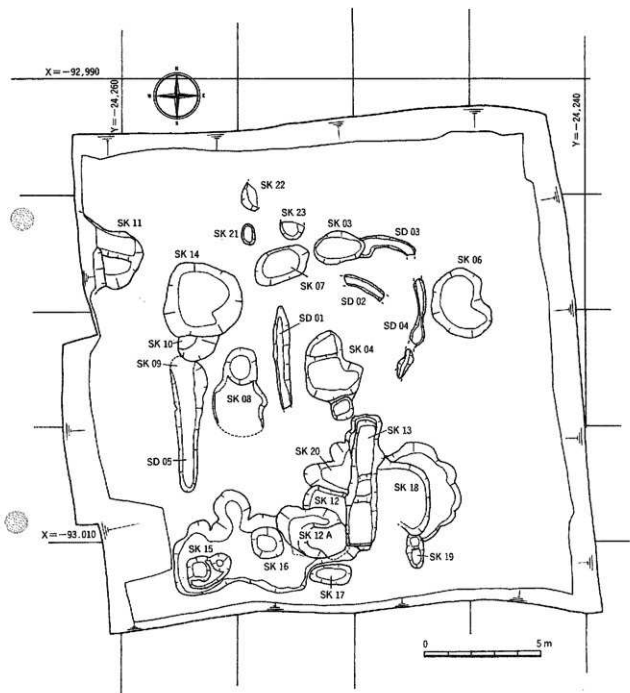


图5 遺構位置圖

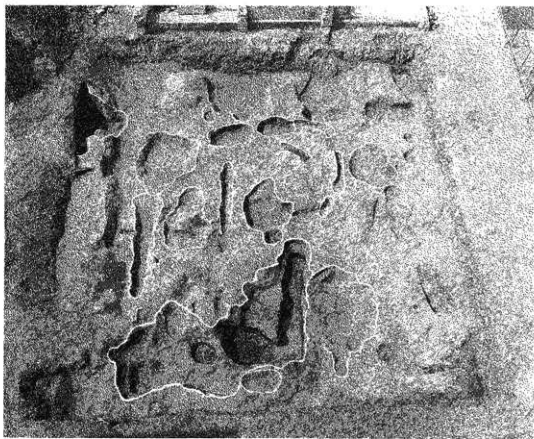


写真6 調査区全景(南から)〔白線輪郭が近世以前の遺構〕



写真7 調査区全景(北西から)

3. 遺構と遺物

(1)古墳時代以前

遺構は、検出されなかったが、遺物は、近世の土坑埋土から弥生時代後期と思われる土器片が少量検出されたほか、時期不明のチャート製削片1点がある。

縄文時代の遺物は、当遺跡では台地上面よりも、近世に石垣で護岸整備された紫川が、かつて自然河川の状態であったときの谷地形にあたる斜面の堆積層から検出されている。⁶⁶

今回の調査地点では、東側が谷地に近づくものの、近世の遺構埋土にも、縄文、弥生時代の遺物は、ほとんどみられなかった。

(2)古墳時代

遺構は、検出されなかった。遺物は、近世の上坑から小破片であるが多数出土している。SK10、14からは、5世紀中頃と思われる土師器高坏片、台付甕片、壺片と共に、5～6世紀の須恵器片が出土した。この遺構からは、近世陶磁器が出土せず、16世紀代の陶器片がわずかに検出された。また、遺構埋土も黄橙色土と暗褐色土のブロックから成り、他の近世土坑の埋土と異っていた。当遺構の時期や性格は特定できていない。

SK12からは石製模造品の勾玉が1点出土した。石製模造品は、10次調査地点の竪穴住居跡(SB01-B)埋土から白玉が2点出土し、5世紀中頃と思われる土師器を伴っている。

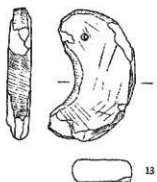
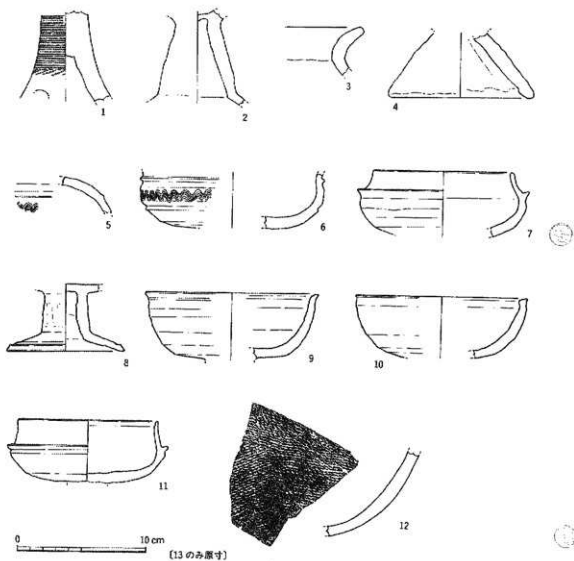
古墳時代の遺構は、当遺跡ではこれまで、竪穴住居跡や溝などが検出されている。集落の規模は、はっきりしていないが、当調査区も古墳時代の遺構面、包含層がかつて残存していたと思われ、遺物としては、相当量検出された。

また、7世紀頃の須恵器片も少量出土した。

(3)古代・中世

遺構は、検出されなかった。遺物は、近世の土坑埋土から小破片の状態少量出土している。平安時代では、緑釉陶器片などがわずかに出土した。中世では、山茶碗片、平瓦片などが少量出土したにすぎない。16世紀代の陶器片は、SK10、14で遺構の上層時期の資料として検出されているが、小片であり量も少ない。

本調査区西側の10、11次調査地点でも、該期の遺構は検出されておらず、遺物もごくわずかであった。



番号	器種	時期	出土位置
1	弥生土器・高杯	弥生時代前期	SK15
2	土師器・高杯	5世紀中頃	SK15
3	土師器・高杯	"	SK15
4	土師器・高杯	"	SK14
5	土師器・高杯	"	SK06
6	土師器・高杯	"	7DG 段北上
7	土師器・高杯	"	7DG 段北
8	土師器・高杯	"	SK10
9	土師器・高杯	"	SK11
10	土師器・高杯	"	SK14
11	土師器・高杯	6世紀前後	SK10
12	土師器・高杯	5世紀中頃	SK06
13	石製	古墳時代	SK12

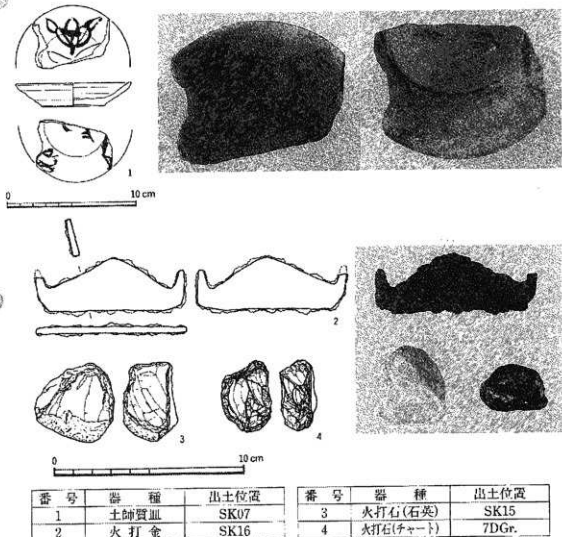
図6 弥生・古墳時代の出土遺物

(4)近世

今回の調査では、近代以降の擾乱上坑を除くと、検出された遺構は、ほとんどが近世に構築されたと考えられる。遺構の種類は、上坑(SK)が21基、溝状遺構(SD)5本である。各遺構は、上部が滅失していると思われるので、本来の形状を保つものではないであろう。また、柱穴等が検出できなかったことは、同じ要因によるものかもしれない。

遺物は、各土坑埋土から検出され、大部分が陶磁器である。金属製品、石製品などは少量であり、木製品は検出できなかった。自然遺物には、貝殻・骨片がある。特に、SK12では、ハマグリを主体とし、シオフキ、アサリを少量含む貝の集中が埋土中に検出された。

陶磁器は、17世紀から19世紀中頃までのものがあるが、江戸時代後期のものは少ない。



番号	器種	出土位置
1	土師質皿	SK07
2	火打金	SK16

番号	器種	出土位置
3	火打石(石英)	SK15
4	火打石(チャート)	7DGr.

図7 近世の出土遺物

SK03(遺構の長さ、幅、深さの数値は、最大値を示す。以下同じ。)

〈形状〉楕円形

〈長さ〉約2.2m

〈幅〉約1.4m

〈深さ〉約0.8m

〈埋土〉灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉18世紀

〈遺構の性格〉廃棄土坑か

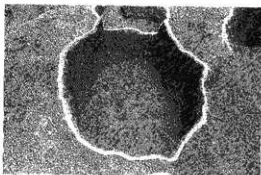


写真8 SK03

器種	小	小	中	大	磁	物	灰	内	地	計	
材質	陶	瓦	土	石	鉄	骨	漆	丸	瓦	管	
陶器	7	1	1	2	2	1	1	1			17
磁器	1	3	1								5
土師質		2						1			3
瓦質									12		12
その他									1	少	1
計	8	4	3	2	2	1	1	1	12	1	24

表1 SK03遺物表



写真9 銅製煙管

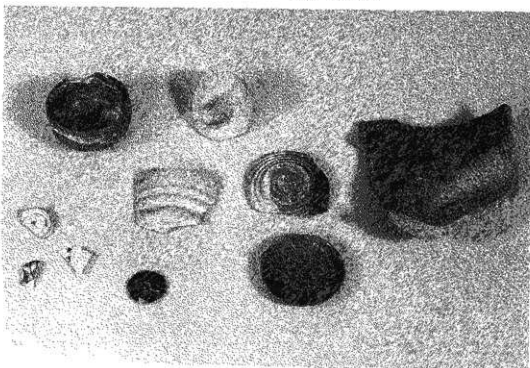


写真10 SK03主要遺物

SK04

〈形状〉 不整形

〈長さ〉 約3.9m

〈幅〉 約2.5m

〈深さ〉 約0.7m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 18世紀前半

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か

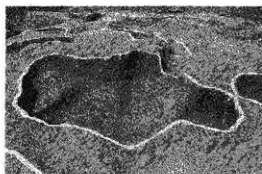


写真11 SK04

器種 材質	陶器	小 杯	小 皿	皿 鉢	鉢 鉢	鉢 鉢	内 蓋 皿	蓋 筒?	手 付 水 注	汁 次	壺	壺	瓦 管	漆 製 品	鉄 釘	地 石	火 打 石	R	計
陶器	11			4	4	3		1	1	1	1								26
磁器		8		3															11
土師器			9	1			2					1							13
瓦 質													4						4
その他														1	1	1	1	1	少 5
計	11	8	9	8	4	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		59

表2 SK04遺物表

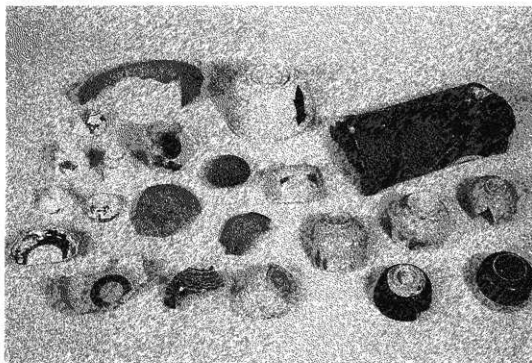


写真12 SK04主要遺物

SK05

- 〈形状〉 不整円形
 〈長さ〉 約3.0m
 〈幅〉 約2.2m
 〈深さ〉 約0.8m
 〈埋土〉 灰褐色砂質土
 〈遺物の時期〉 17世紀後半～18世紀前半
 〈遺構の性格〉 廃棄土坑か

器種	個	種	文	計
陶器	2	1		3
磁器				
土師質				
瓦質			3	3
その他				
計	2	1	3	6

表3 SK06遺物表

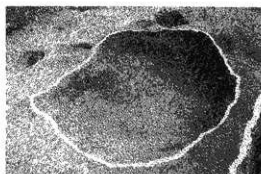


写真13 SK06



写真14 SK06主要遺物

SK10-14

- 〈形状〉 不整円形
 〈長さ〉 約4.2m
 〈幅〉 約3.3m
 〈深さ〉 約0.9m
 〈埋土〉 黄褐色土ブロック、灰褐色土
 〈遺物の時期〉 16世紀(古墳時代が多い)
 〈遺構の性格〉 不明

器種	個	種	計
陶器	1	1	2
磁器			
土師質			
瓦質			
その他			
計	1	1	2

表4 SK10-14遺物表

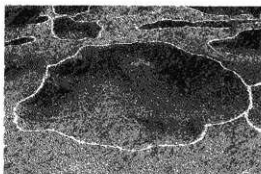


写真15 SK10-14

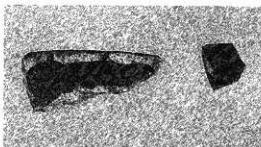


写真16 播鉢片と碗片

SK07

〈形状〉 楕円形

〈長さ〉 約2.5m

〈幅〉 約1.4m

〈深さ〉 約0.6m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 17世紀後半～18世紀前半

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か



写真17 SK07

目録 材質	陶 器	小 瓶	小 環	子 付 水 鉢	内 耳 鍋	瓦 葺	土 管 ?	磁 石	計
陶器	3	1		1					5
磁器			1						1
土師瓦		3			1		1		5
瓦葺						1			1
その他								1	1
計	3	4	1	1	1	1	1	1	13

表5 SK07遺物表

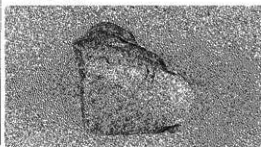


写真18 磁石片

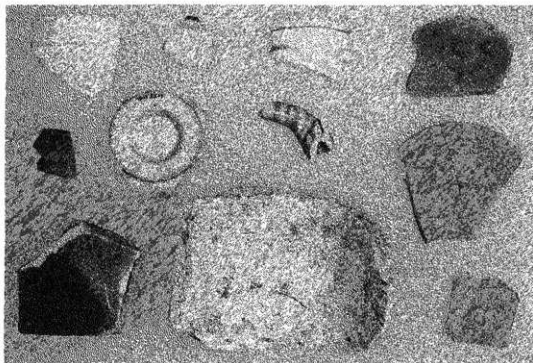


写真19 SK07主要遺物

SK09

〈形状〉 楕円形

〈長さ〉 約2.0m

〈幅〉 約1.5m

〈深さ〉 約0.6m

〈埋土〉 灰褐色土

〈遺物の時期〉 17世紀中頃

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か

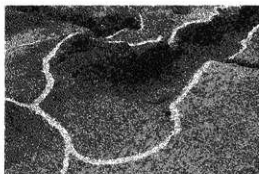


写真22 SK09

品種	碗	皿	小 皿	帯 皿	小 鉢	鉄 釘	貝	計
陶器	2	3		1				6
磁器	2				1	1		4
土師器			4					4
瓦質								
その他						3	少	3
計	4	3	4	1	1	1	3	17

表7 SK09遺物表

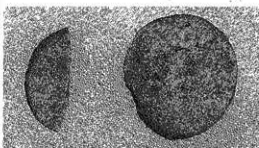


写真23 手づくね小皿

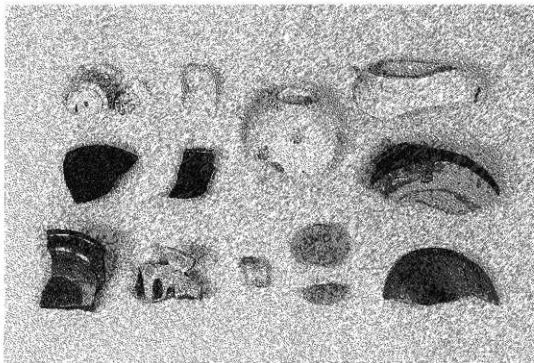


写真24 SK09主要遺物

SK12A

〈形状〉 不整円形

〈長さ〉 約3.0m

〈幅〉 約2.2m

〈深さ〉 約1.5m

〈埋土〉 黄褐色ブロック土

〈遺物の時期〉 17世紀後半

〈遺構の性格〉 不明

遺物 材質	磁器		小 小		鉄		計
	瓶	皿	瓶	罎	釘	釘	
陶器	2				1	1	4
磁器		1		1			2
土師器			1				1
瓦質							
その他						1	1
計	2	1	1	1	1	1	8

表10 SK12A 遺物表

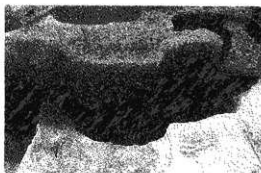


写真30 SK12A

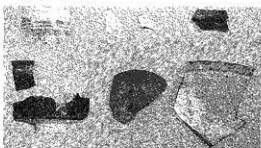


写真31 SK12A 主要遺物

SK17

〈形状〉 楕円形

〈長さ〉 約1.8m

〈幅〉 約1.0m

〈深さ〉 約0.3m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 18世紀か

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か

遺物 材質	器 内 耳 埴		計
陶器			
磁器			
土師器	1		1
瓦質			
その他			
計	1		1

表11 SK17遺物表

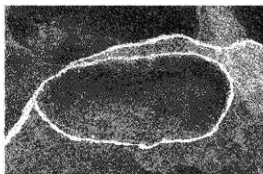


写真32 SK17



写真33 内耳埴

SK13

〈形状〉 長方形

〈長さ〉 約5.7m

〈幅〉 約1.3m

〈深さ〉 約1.7m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 17世紀末～19世紀前半

〈遺構の性格〉 穴藏か

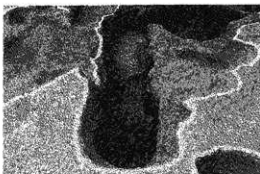


写真34 SK13

器種 材質	陶	磁	小 皿	植 木 鉢	酒 鉢	茶 器	漆 器	手 付 水 桶	燗 桶 口	香 炉	燗 壺	小 厚 煎	小 煎 煎	土 壺	瓦	水 打 石 ?	漆 石	銀 釘	遺 金 ?	貝	計
陶器	13	5		3	3	2	1	1	1	1	1	1	1								32
磁器	3	2										1	1	1							8
土師瓦			10											1							11
瓦質															7						7
その他																1	1	1	1	少	4
計	16	7	10	3	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	7	1	1	1	1		62

表12 SK13遺物表

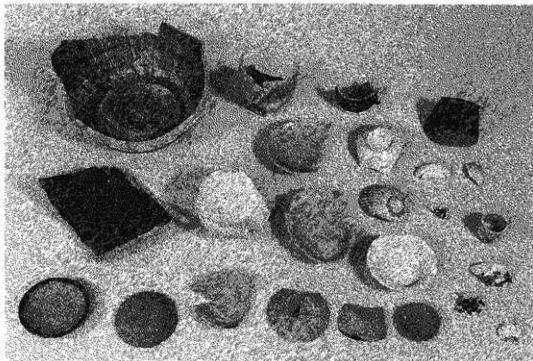


写真35 SK13主要遺物

SK15・16

〈形状〉 不整形

〈長さ〉 約5.6m

〈幅〉 約3.3m

〈深さ〉 約1.2m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 17世紀～18世紀中頃

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か



写真36 SK15・16

器種	陶	磁	鉄	銅	鉛	錫	銀	金	ガラス	石	骨	角	木	竹	草	土	紙	布	糸	貝	獣	植物	その他	計
陶器	56	14	14	3	1	5	1	7	7	3	3	2	2											122
磁器	24	5				7	5	1																42
土師瓦				23							4				2	1	1		1					34
瓦																			7				20	30
その他																								13
計	80	19	14	28	8	16	5	7	7	3	4	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	241

表13 SK15・16遺物表

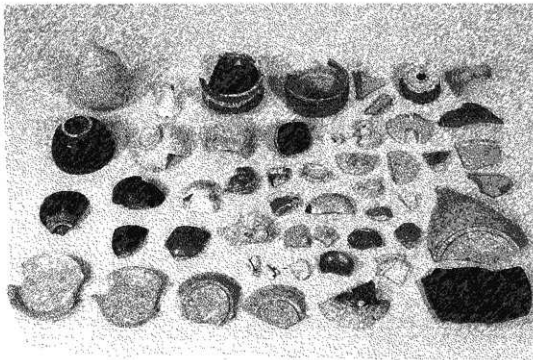


写真37 SK15・16主要遺物(陶器)

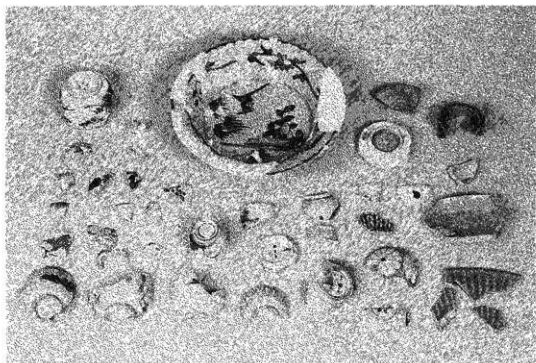


写真38 SK15・16主要遺物(磁器)

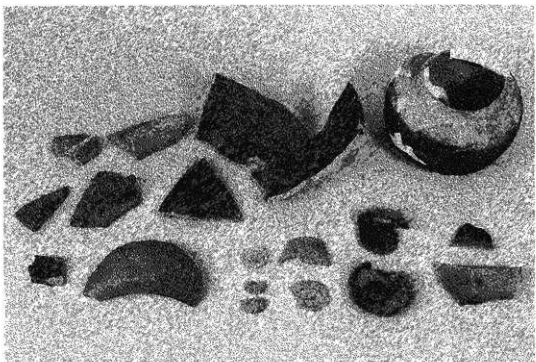


写真39 SK15・16主要遺物(土師質など)

SK20

〈形状〉

〈長さ〉 2 m以上

〈幅〉 約2.0m

〈深さ〉 約0.6m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 18世紀前半

〈遺構の性格〉 廃棄土坑か



写真44 SK20

品種 材質	陶器	小 埴 瓦	小 皿	計
陶器	1			1
磁器		1		1
土師質			1	1
瓦質				
その他				
計	1	1	1	3

表16 SK20遺物表

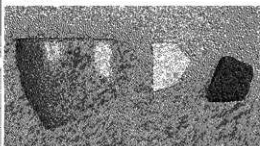


写真45 SK20主要遺物

SK21

〈形状〉 楕円形

〈長さ〉 約0.9m

〈幅〉 約0.5m

〈深さ〉 約0.2m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 近世

〈遺構の性格〉 不明

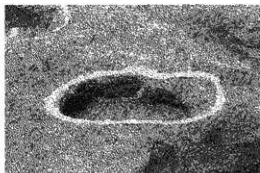


写真46 SK21

品種 材質	瓦	計
陶器		
磁器		
土師質		
瓦質	1	1
その他		
計	1	1

表17 SK21遺物表

SK22

〈形状〉

〈長さ〉

〈幅〉

〈深さ〉0.4m以上か

〈埋土〉灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉18世紀中頃

〈遺構の性格〉廃棄土坑か

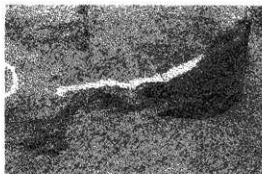


写真47 SK22

器種	陶	小	小	瓦	鉄	計
材質	陶器	土	瓦	瓦	釘	
陶器	3	1				4
磁器	1		2			3
土師器		1				1
瓦質				6		6
その他					6	6
計	4	3	2	6	6	20

表18 SK22遺物表

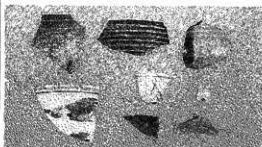


写真48 SK22主要遺物

SK23

〈形状〉U形か

〈長さ〉約1mか

〈幅〉約1m

〈深さ〉約0.5m

〈埋土〉灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉18世紀か

〈遺構の性格〉不明

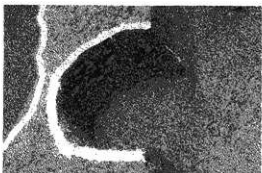


写真49 SK23

器種	陶	土	瓦	内	鉄	計
材質	陶器	土	瓦	瓦	釘	
陶器	3	1	1			6
磁器						
土師器				1	1	2
瓦質						
その他					1	1
計	3	1	1	1	1	8

表19 SK23遺物表



写真50 SK23主要遺物

SD01

〈形状〉 溝状

〈長さ〉 4.5m以上

〈幅〉 約0.7m

〈深さ〉 約0.3m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 19世紀前半

〈遺物の性格〉 不明



写真51 SD01

名稱	数量	小	手	種	安	火	人	瓦	計
材質	類	道	付	木	海	耳	形	瓦	計
陶器	6	2	1	1	1	1			13
磁器	4								4
土師貨		2				1	1	1	6
瓦質								2	2
その他								2	2
計	10	2	2	1	1	1	1	2	27

表20 SD01遺物表

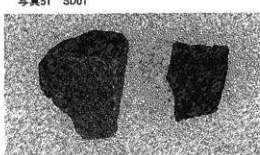


写真52 磁石片

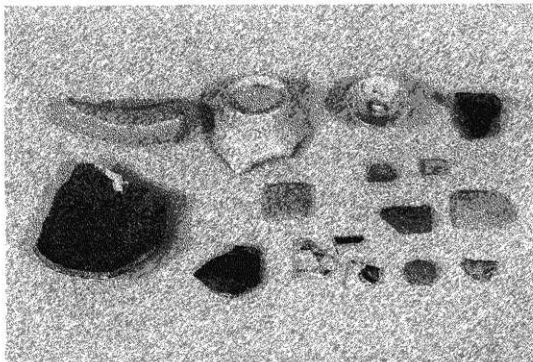


写真53 SD01主要遺物

SD02

- 〈形状〉 溝状
- 〈長さ〉 2.0m以上
- 〈幅〉 約0.4m
- 〈深さ〉 約0.5m
- 〈埋土〉 灰褐色砂質土
- 〈遺物の時期〉 出土遺物なし
- 〈遺構の性格〉 不明

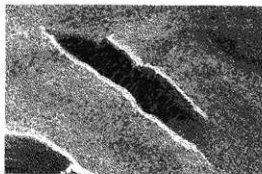


写真54 SD02



写真55 調査風景

SD03

- 〈形状〉 溝状
- 〈長さ〉 2.3m以上か
- 〈幅〉 約0.5m
- 〈深さ〉 約0.2m
- 〈埋土〉 灰褐色砂質土
- 〈遺物の時期〉 18世紀
- 〈遺構の性格〉 不明



写真56 SD03

品名	種	計
陶器	1	1
磁器		
土師器		
瓦		
その他		
計	1	1

表21 SD03遺物表

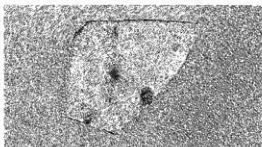


写真57 SD03遺物

SD04

〈形状〉 溝状

〈長さ〉 4.0m以上か

〈幅〉 約0.5m

〈深さ〉 約0.4m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 19世紀前半

〈遺構の性格〉 不明



写真58 SD04

器種	陶	磁	瓦	計
陶器	1	1		2
磁器				
土師質				
瓦質			2	2
その他				
計	1	1	2	4

表22 SD04遺物表

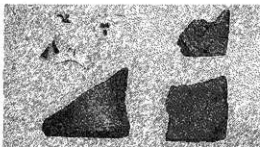


写真59 SD04主要遺物

SD05

〈形状〉 溝状

〈長さ〉 3.5m以上か

〈幅〉 約1m

〈深さ〉 約0.5m

〈埋土〉 灰褐色砂質土

〈遺物の時期〉 17世紀中頃

〈遺構の性格〉 不明



写真60 SD05

器種	陶	磁	内耳 土	磁 石	鉄 釘	貝	計
陶器	1	1					2
磁器							
土師質			1				1
瓦質				1			1
その他					1	少	1
計	1	1	1	1	1		5

表23 SD05遺物表

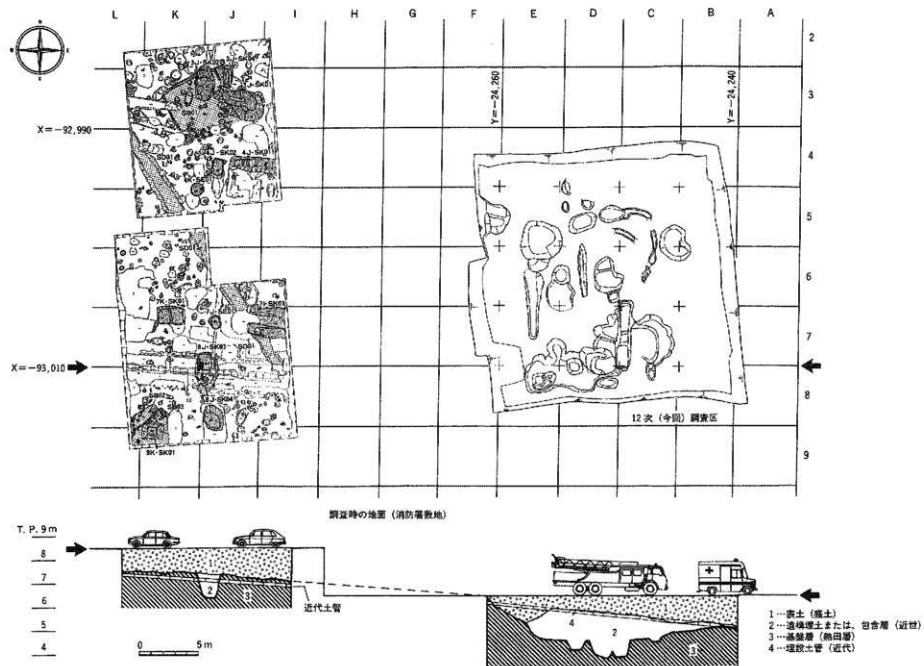


図8 調査区域と土層断面模式図(矢印間)

4. まとめ

本調査によって得られた資料は、近世城下町期のものが主体であった。しかし、近世の土坑埋土からは、近世陶磁器類にまじって古墳時代などの遺物が混入していることが多く、近世には、該期の遺物を含む包含層が当地域に存在していたと思われる。

古墳時代の遺物のなかには、初期の須恵器が含まれており、焼投窯で現在のところ最古の東山111号窯期頃の消費地でのあり方を示すものである。今後は、さらに良好な状況で検出されることが期待される。

近世の遺構については、その形状が不整形のものがほとんどであった。そのなかで、SK13は、長方形を呈するもので、11次調査区(図8)の4J・SK01に類似し、長軸方向が90度異なっているが、10次、11次調査の成果から推測された屋敷建物の方向と同一の規定により構築設計されていたことを示すものかもしれない。

また、不整形を呈する多くの土坑群には、遺構埋土の切合い状態が確認できないものがあつた(SK15・16・SK12など)。出土陶磁器も、同一個体の破片がかなり広がっている状況もあり、ほぼ同じ地点において、何度か廃棄用の土坑が掘られた結果、以前に埋った部分まで掘り返されている状態になっていると思われる。埋土の掘りあがった状態は、複数の土坑が重複した形状となる。このような状況は、江戸の屋敷地においても指摘されている。



写真6 SK15-16埋土断面



図9 調査区推定位置(11-12次)

(尾府名古屋園より)

今回の調査地点は、18世紀の城下絵図の道路、川(紫川)などの位置によると、水野氏の屋敷地付近にあたると思われるが、遺構、遺物による位置の確定ができていない。

各遺構から出土した陶磁器の時期によって、遺構の時期を大きく3つに分けた分布図が図10である。全体としては、遺構が分散している地域であるが、江戸時代中期には、調査区の中央付近で南北に配置されている。この地域が中庭あるいは、裏庭となっていたので

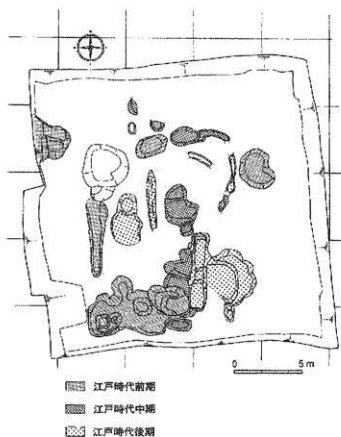


図10 遺構の時系列別配置

- ▨ 江戸時代前期
- ▤ 江戸時代中期
- ▩ 江戸時代後期

あろう。なお、調査区内では、井戸と思われる遺構はなかった。

遺物については、周辺の調査区も合わせ、器種の構成によって遺構や該当する屋敷地の特色をみだす分析ができていないが、出土陶磁器の全体を概観すると、瀬戸、美濃窯製品、肥前陶磁、京焼、中国磁器など、たとえば、名古屋城三の丸地内の上級武家屋敷地と呼ばれる地点と比較して、特に器種が少ないとはいえ、質についても、比較が困難であるが、あまり見劣りするというのではない印象である。また、比較にあたっては、検出されている資料について、同一屋敷地内でも各遺構の

遺物を使用した人々が同等でないことも注意する必要がある。日常で使用する陶磁器類には、各産地の焼物が、屋敷の主人の趣味も含めて購入され集められたものであろう。

今回の調査で出土した磁器については、17世紀から18世紀前半頃までは、肥前磁器を含めた63点中6点が中国製であり9.5%を占める。18世紀中頃から19世紀前半までは、91点中2点が中国製で、2.1%であった。

特殊な遺物としては、仏教関連の石造物（空塔など）にみられる「三茎蓮^⑧」を墨描により表現したと思われる土師皿が18世紀頃の陶磁器と共にSK07から検出されている。

また、日常用具でありながら出土例の少なかった火打金が検出された。これは、江戸時代前期頃のものと思われ、「山型^⑨」のものと「かすがい型^⑩」の中間的な形をしている点が、火打金の形態変化を考える資料として注目される。

今回、残存状態が良好とはいえない地点の調査であったが、地下深くまで掘り込まれた近世の遺構が検出され、埋土には、さらに古い時代の遺物も混入していた。都心の鉄筋コンクリート建物の真下にあっても、歴史を語るに足る資料が包蔵されているのである。

註 記

- (1) 名古屋市教育委員会 (1987) 「第3次竪三蔵通遺跡概要報告書」
名古屋市教育委員会 (1989) 「竪三蔵通遺跡第8次・9次調査の概要」
- (2) 名古屋市教育委員会 (1980) 蓬方文庫所蔵古地図複製 No. 1
- (3) 林 英夫編 (1987) 「図説愛知県の歴史」 河出書房新社
- (4) 註(1)に同じ
- (5) 名古屋市教育委員会 (1986) 「第3次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書」
名古屋市教育委員会 (1987) 「第4次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書」
名古屋市教育委員会 (1991) 「竪三蔵通遺跡第10次調査の概要」
- (6) 江戸遺跡研究会 (1992) 「江戸の食文化」 古川弘文館
- (7) 奈良大学教授水野正好先生から御教示を頂いた。
- (8) 高嶋幸男 (1985) 「火の道具」 柏書房

竪三蔵通遺跡

—第12次調査の概要—

1993年3月31日

編 集 名古屋市見晴台考古資料館
発 行 名古屋市教育委員会
印 刷 クイックス

